ハンドテスト検査場面に関する実験的研究

——教示に加えられた検査定義がハンドテスト反応に及ぼす影響——

京都大学 吉 川 眞 理¹

An experimental study of the Hand Test situation : Effects of test definition during instruction on Hand Test performance

Mari Yoshikawa (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Kyoto University, Sakyo-ku, Kyoto 606*)

The purpose of this study was to examine how Hand Test performance is affected by test definition included with task instructions. The Hand Test was administered to male college students equally divided into three groups which differed in terms of the type of test definition included with the task instruction as follows: (1) Emotionally disturbed test definition (ED Group); (2) Imagery test definition (IM Group); and, (3) Standard instruction with no test definition (N Group). The MMPI was subsequently administered to all subjects with the following results. The ED Group revealed higher DES and lower ACQ scores than the N Group. The IM Group obtained higher DES and TEN scores and lower ACQ and ICP (CRIP) scores than the N Group. The ED Group exhibited positive correlations between PASS, ACQ and ICP (CRIP) scores and psychopathological MMPI scales while the IM Group revealed negative correlations between ACQ, PASS, TEN, ICP (CRIP), FEAR and DES scores and psychopathological MMPI scales. These results indicated in general that Hand Test performance is sensitive to the test situation and that this factor should be taken into account when Hand Test responses are interpreted.

Key words: the Hand Test, test definition, test situation, projective technique, MMPI.

手は外部環境にはたらきかける運動器官であると同時に外部環境に直接触れて外部環境の情報を集める感覚器官でもある。感覚器官としての手は口とともに最も敏感な器官であり、運動器官としての手は人間に特有の優れた機能性をそなえている。“手は外部の脳”といわれ、手から神経を介して脳が外部環境情報を受け入れ、複雑な手の操作の指令を出す。長い進化の過程の中で手と脳のいずれもが原因となり結果となって、現在の人間の手と脳ができてきたと考えられている。このことは発達過程にもあてはめることができ、精神が手をつくり、また手が精神をつくるとも言い換えることができる。このように手と心のありかたとは切り離すことのできないつながりをもつものである。

また、手は情動を表出する機能をもつ。情動は身体にその基礎をおくものであるから手の表情や動きにそれがあらわれる。そこで、私達はある人の手の表情や動きを

見ることによって言語を媒介させずにその人の情動を認知することができるのである。

Wagner (1962 a, b) は、このような“手”の表情を刺激図として用いた投影法 Hand Test (ハンドテスト) を刊行した。1950 年代後半より米国を中心に信頼性、妥当性の検討が続けられており、比較文化的研究も行われている。日本では 1970 年に箕浦が紹介し標準化が試みられている (箕浦, 1970)。

ハンドテストは 11.4 cm×8.7 cm の 10 枚の図版より構成されている。9 枚はあいまいなポーズの手の絵が描かれ、10 枚目はブランクカードである。検査者は図版を 1 枚ずつ呈示し“その手が何をしているように見えるか、感じたままを教えてください。”(箕浦訳) と言い、ブランクカードでは“まず手を想像して、その手が何をしているか言って下さい。”(箕浦訳) と言う。反応は逐語的に記録されるが、あいまいな反応に対してはその都度質問しその答えは自発的反応と区別して記録する。100 秒たっても反応が生じない場合は“FAIL”とし、被験者が自分の手で図版をまねた場合は“E” (emulate), 自分の手をつかって反応を説明した場合は“D” (demonstrate) と記入する。その他、カードの向き、初発反応時間など施行上の手続きや記録はロールジャッパ法になら

¹ この論文の作成にあたり御指導をいただきました甲南女子大学文学部梅本堯夫教授、京都大学教育学部河合隼雄教授、坂野 登教授に心より感謝いたします。また岡山大学文学部箕浦康子助教授よりハンドテストの研究について貴重な御助言、ご協力をいただきました。ここに記して厚く感謝いたします。

Table 1
The Hand Test scoring symbols (Wagner, E. E. The Hand
Test Manual をもとに作成)

Scoring symbols	Definitions	Categories
AFFection	他者に愛情, 行為を与え または交換する行為	INTERPERSONAL
DEPendency	他者に頼ったり援助を求める行為	
COMmunication	他者に情報を呈示, 交換する行為	
EXHibition	他者に自分を見せびらかす行為	
DIRection	他者を支配, 指示する行為	
AGGression	他者に苦痛, 敵意, 攻撃を加える行為	ENVIRONMENTAL
ACTive	物体にはたらきかける達成が比較的容易な行為	
ACQuisition	物体にはたらきかけ目標を達成しようと懸命な行為	
PASSive	手からわざと力を抜いている状態 リラックス	
TENsion	力がこもっているが何も為していない緊張状態	
InCaPacity ^{a)}	病気, 障害, 死など手の機能が障害されている	MALADJUSTIVE
FEAR	苦痛, 死などで脅かされている手または脅かす手	
DEScriptive	描かれた手という認識のみ 細部や感情の叙述	WITHDRAWAL
BIZarre	刺激を無視した了解不能の反応	
FAILure	反応なし	

^{a)} Wagner が “CRIPpled” と称した Scoring symbol をさすがこの語が不適当という指摘があり, 以下, 本研究においてはこの改称を用いて記述.

うものが多い。反応は Table 1 の範疇に分類され, それぞれの範疇にみられる反応数をもってスコアとされる。Wagner はあいまいな手のポーズをどのように認知するかについて 認知者の 知覚-運動系の傾向が反映されると仮定し, 手の絵には原型としての行動傾向 (prototypal action tendencies) が投影されやすいと考えた。ハンドテストは幅広い知的水準に適用できること, 施行とスコアリングがともに短時間で済むこと, 脅威が少ないことなどの長所があげられており, 特に攻撃的な行動化の指標として研究されてきた。

しかし一方では, ハンドテストの刺激図版がかなり構造化されており, 最も偽造 (falsification) の対象となりやすいといわれる“反応の内容”を解釈の理論的根拠にすることから, ハンドテスト反応が被検者によって意図的に偽造される可能性が指摘されている (Singer & Dawson, 1969)。刊行者である Wagner 自身も, ハンドテストが簡略で, 比較的よく構造化された刺激を用いているために, 反応を解釈する際の理論的根拠や, 何が“良い”あるいは“悪い”反応であるかという情報が漏れることによって, その判別力を損う恐れがあると述べている (Wagner, 1962 a)。Singer らによる実験 (Singer & Dawson, 1969) は, これらの理論的根拠や情報が被検者に直接的なかたちで漏れなくとも, 被検者は反応がどのように解釈されるかをそれぞれに推測し, 意識的な努力によって反応を“つくる”ことができることを示し

た。これは, ハンドテストを実際的な判別のための道具として単独で用いることの危険を示唆している。しかし, それにもかかわらず, 他の多くの投影法と同様にハンドテストも, 臨床場面において用いる補助的な手段として意義をもつものである。一般に, 投影法は反応の自由度が大きいために, その反応は被検者の内面的特徴を反映すると考えられている。さらに, 個人別に実施される投影法の反応には, 被検者自身の内面的特徴に加えて, 検査場面のさまざまな状況, 検査者と被検者の間の相互関係などの要因も反映されるといわれている。

そこで, ハンドテストにおいても検査場面の要因が, 被検者を通してどのように反応に影響するかについて調べる研究が求められる。本研究では, ハンドテストの施行時に, 検査目的に関する情報である“検査定義”を教示に加えることによって, ハンドテスト反応にどのような影響がみられるかを調べた。同様に, ハンドテストスコアと MMPI 人格特性尺度の間の相関係数についても検討した。これらは, 今後ハンドテストを臨床場面において被検者の内面的特徴及び被検者と検査者の間の相互関係のあり方を理解するための手段として用いる上で必要である。

方 法

被検者 男子学生 (修士・博士課程在学者をふくむ)
で年齢範囲は 18 歳より 29 歳, いずれも検査者と個人

的な面識を持たず、検査者の依頼を受諾した協力者 90 名。

なお、MMPI においていずれかの妥当性尺度あるいは 2 つ以上の臨床尺度の T 得点が 70 を越えた者は除かれている。

手続き 被検者は、ハンドテストに際して、検査の目的は情緒障害検査 (Emotional Disturbed Test) であると定義される ED 群と、想像性検査 (Imagery Test) と定義される IM 群と、何ら検査目的について説明されない標準手続きによる N 群の 3 群のうち、そのいずれかに無作為に割り当てられ、各群は 30 名ずつで構成された。検査者はいずれの群も筆者が単独でこれをつとめた。

1. ハンドテスト

個室において検査者、被検者が 90 度の角度をとって着席するよう配慮された。ED 群の被検者は“このテストはアメリカにおいて、情緒障害の研究のために開発され、精神病院で患者の障害の程度を知るために使われています (Henry & Rotter, 1956).” IM 群の被検者は、“このテストはアメリカにおいて想像性、想う像と書きますが、その研究のために開発され、対象をいきいきととらえ独創に富んだ思考をする程度を調べるために使われています (Calden & Cohen, 1953).” と検査定義が与えられた。N 群には何ら定義が与えられなかった。その後すべての群に対して標準的な教示を行った。さらに、検査者がその場で反応を筆記するが、記録もれもあるので録音することを了承してもらった。その他の点については、The Hand Test Manual に準じ、正規の WPS カードを用いてハンドテストを施行した。ハンドテスト終了後、とくに N 群の主観的な検査定義を知るために、今行ったこのハンドテストは、どんな目的をもつ何を調べるためのテストだと思いましたか？”と口頭で質問した。

2. MMPI

1. の終了後“多面的に人格をとらえるテストです。”とことわって冊子式 MMPI (日本版 MMPI 550 項目三京房) を実施した。

分析 ハンドテスト反応は、録音テープの再生によって逐語録をとり、The Hand Test Manual に準じて、スコアリングを行った。即ち、Table 1 にまとめられたハンドテストシンボルの定義に従って各反応を分類し、10 枚のカードを通しての各シンボルの出現数を各スコアとした。なお、本分析には、上位カテゴリーである INTERPERSONAL, ENVIRONMENTAL, MALADJUSTIVE, WITHDRAWAL の各スコアは用いられなかった。スコアリングの信頼性を確認するために筆者とは独立にもう 1 名のスコアラーを設定し、両者のスコアリング (各反応の各シンボルへの分類) 一致率を算出したところ 95.1% であった。各スコアは集計され、他に

Table 2
Median values and Median one-way analysis
for the Hand Test variables comparing ED
Group matched against N Group and IM
Group matched against N Group

Variable	Median values			Median test	
	ED 群 (30) ^{a)}	IM 群 (30) ^{a)}	N 群 (30) ^{a)}	Chisq ED-N	(p.) IM-N
AFF	2.40	2.63	2.67	0.07	1.69
DEP	1.87	2.23	1.80	1.66	1.66
COM	2.37	2.33	2.10	0.60	2.36
EXH	0.80	0.87	0.37	0.27	0.60
DIR	2.53	3.30	2.60	2.37	0.26
AGG	0.97	0.93	1.10	0.28	1.10
ACT	10.70	11.47	11.77	0.07	0.26
ACQ	0.67	1.20	2.00	9.48**	4.21*
PASS	0.83	0.70	0.73	0.07	1.69
TEN	0.87	1.67	0.90	0.59	5.61*
FEAR	0.37	0.53	0.23	0.34	2.66
ICP	0.63	0.23	0.60	0.07	3.96*
DES	1.17	1.10	0.43	3.96*	5.00*
BIZ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
FAIL	0.07	0.03	0.13	0.35	0.34
R	25.9	28.5	26.1	0.59	1.64
AIRT	10.0	12.7	12.7	1.05	0.26
H-L	25.7	42.3	37.5	4.20*	0.59

a) The number of subjects.

* $p < .05$, ** $p < .01$

全反応数 R, 平均初発反応時間 AIRT, 初発反応時間の最大と最小の差 H-L が算出された。

MMPI は 3 種の妥当性尺度、10 種の臨床尺度の T 得点に加えて、特に本実験に関連が深いと思われる社会的望ましさに対する傾向を知るために Edwards の SD 尺度得点 (肥田野, 1978) が求められた。

結 果

3 群の等質性 上記の MMPI 14 尺度および年齢について、ED 群、IM 群、N 群間で t 検定を行ったところ有意差は認められず、3 群は検査定義以外の要因において等質であることが確認された。

検査定義が教示に加えられなかった N 群被検者の主観的な検査定義 30 名のうち 26 名が“深層心理”“潜在意識”“無意識”“心の状態”“心に思うこと”“精神世界”“常識の有無”“対人関係”などの語を用いて主観的な検査定義を述べた。また別の 3 名は“創造性”“発想の柔軟性”などの語を用い、残り 1 名は“わからない”と述べた。

Table 3
Correlations between the Hand Test scores and the scores of MMPI, SD in each group

↓ Group Symbol ↓	L	F	K	HS	D	HY	PD	MF	PA	PT	SC	MA	SI	SD
AFF	.05	.10	.06	-.13	.05	.02	.17	.03	-.12	-.21	-.09	-.28	-.03	.07
DEP	.01	.25	-.25	-.25	.24	-.09	-.13	-.09	.07	.12	.08	-.16	.19	-.26
COM	.09	-.13	-.07	-.26	.01	-.10	-.17	-.11	-.04	-.13	-.27	.03	-.10	.05
EXH	-.18	.17	-.36*	-.18	.09	-.14	-.20	-.03	.02	.04	-.03	.14	.12	-.14
DIR	-.15	.05	-.22	-.15	.07	-.13	-.07	-.11	-.01	.01	-.05	-.05	.05	-.33
AGG	.04	.17	-.14	-.25	.06	-.06	-.21	-.03	-.13	-.31*	-.10	-.14	-.01	-.18
ACT	.27	.32*	-.13	.07	.23	.07	-.04	.04	-.01	-.08	-.03	-.03	.22	-.11
ED ACQ	.34*	.06	-.07	-.05	.39*	.14	-.09	.06	.07	.01	-.07	-.23	.27	-.15
PASS	.10	.11	-.03	.37*	.23	.27	.12	.11	.16	.15	.02	-.03	.34*	-.09
TEN	.01	.15	.12	.13	-.01	.05	.10	.12	-.07	-.01	.29	.11	-.21	.10
ICP	.18	.14	.09	-.21	-.05	-.09	-.05	.18	.09	.06	.30*	.05	-.13	.07
FEAR	.04	.11	-.03	-.03	-.19	.02	.06	-.12	-.01	-.16	.15	-.22	.10	-.19
DES	.21	.13	.05	-.23	-.03	-.08	-.20	.08	.00	.09	.18	.11	-.01	.03
BIZ	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00
FAIL	-.09	-.27	-.05	-.23	-.24	-.24	-.10	-.14	-.18	-.19	-.18	-.33*	-.06	-.26
AFF	-.19	.20	-.17	.12	-.02	.02	.14	.16	-.17	.21	.09	.04	.07	-.21
DEP	-.24	.29	-.15	-.00	-.07	-.06	-.28	-.15	.08	.10	-.01	.09	.12	-.05
COM	-.09	-.01	-.02	.22	-.14	.15	.13	-.16	-.21	-.04	-.03	.08	-.12	.19
EXH	-.06	-.21	.06	.11	-.26	.07	-.14	-.07	-.27	-.11	-.05	.02	-.17	.27
DIR	-.01	.02	-.13	-.22	-.13	-.24	.01	.27	.15	.04	-.03	.02	-.17	-.02
AGG	-.02	-.01	-.15	.18	-.20	.12	.03	-.18	.05	-.02	.00	.33*	-.11	.15
ACT	-.06	.27*	-.22	.15	-.14	.09	-.01	.06	-.02	-.06	-.05	.25	.06	-.20
N ACQ	-.16	.11	-.07	-.05	-.06	-.03	.13	.01	.27	.04	.24	.16	.07	-.01
PASS	.04	.02	.08	-.04	.13	-.06	.24	.23	-.23	.24	-.01	.03	.14	-.18
TEN	.00	-.06	-.15	.10	-.26	.00	.13	.21	.01	.02	.03	.15	-.11	.04
ICP	-.12	.08	-.10	-.02	.08	.04	.17	.02	-.13	.14	.12	-.00	.06	-.09
FEAR	.29	-.18	.10	.03	.15	.07	-.08	.15	.11	.29	.13	-.19	.10	-.09
DES	-.29	-.12	-.26	-.23	-.04	-.25	-.16	.24	.10	-.09	-.30	-.20	-.06	-.12
BIZ	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00
FAIL	.10	.09	.22	.07	-.03	.05	.05	-.08	.25	-.03	.18	-.11	-.06	.24
AFF	-.02	-.21	.07	-.03	-.05	-.15	-.16	-.15	-.08	-.07	-.12	-.10	-.11	.07
DEP	-.25	-.11	-.07	-.15	-.14	-.18	-.02	-.13	-.12	-.14	-.01	.05	-.08	.04
COM	-.19	-.13	-.05	-.21	-.23	-.23	-.11	-.07	.00	-.10	-.12	.06	-.10	.06
EXH	-.09	-.05	.01	-.16	-.12	-.20	-.26	.00	-.23	-.09	-.04	.11	.01	.01
DIR	.07	-.09	-.01	-.19	-.09	-.10	-.15	-.14	-.24	-.27	-.18	-.04	-.10	.24
AGG	-.24	.02	-.10	-.19	-.13	-.29*	-.24	-.04	-.09	-.07	-.06	.09	.02	-.03
ACT	-.17	-.09	.10	.00	-.10	-.15	-.09	-.03	.18	.07	-.06	.11	-.06	-.04
IM ACQ	-.05	.03	-.03	-.07	-.18	-.09	-.16	-.01	-.01	.00	.05	.13	-.06	.02
PASS	-.19	-.05	-.11	-.24	.03	-.19	-.15	-.08	-.02	-.03	-.07	-.34*	.06	-.12
TEN	-.01	-.32*	.07	-.08	-.14	-.11	-.25	-.26	-.26	-.24	-.30*	-.21	-.39*	.31*
ICP	-.11	.03	-.18	-.10	-.32*	-.04	.06	-.02	.17	.14	.10	.12	-.09	.02
FEAR	-.34*	.03	-.03	-.08	-.23	-.18	-.20	-.15	-.28	-.37*	-.23	.05	-.20	.09
DES	-.13	.07	-.26	-.40*	-.01	-.36*	-.16	-.29	-.20	-.21	-.15	-.18	.00	-.30
BIZ	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00
FAIL	.18	-.13	.17	-.02	.25	.03	.04	-.14	.10	.13	-.10	-.26	.04	-.23

* $p < .05$

教示に加えられた検査定義がハンドテスト反応に及ぼした影響 ED 群とN群, IM 群とN群のハンドテストスコアをそれぞれ中央値検定したところ Table 2 に示されるような結果が得られた。すなわち ED 群と IM 群は両群ともにN群と比較すると ACQ スコアが有意に低く DES スコアが有意に高かった。さらに IM 群はN群と比較すると ICP スコアが有意に低く TEN スコアが有意に高かった。また ED 群はN群と比較して *H-L* が有意に小さかった。以上の結果は実験的に検査定義を教示に加えることやその内容がハンドテストスコアに影響することを示している。

教示に加えられた検査定義がハンドテストスコアと人格特性尺度の相関に及ぼした影響 ハンドテストスコアと MMPI 及び Edwards の SD 尺度値の Kendall の相関係数を算出し、それを群別に示したところ Table 3 のようになった。これによるとN群, ED 群, IM 群の各群の相関表はそれぞれ異なる様相を示している。N群では AGG 反応と MA 尺度値, ACT 反応と F 尺度値の間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。ED 群では ACT スコアと F 尺度値, ACQ スコアと L, D 尺度値, PASS スコアと HS, SI 尺度値, ICP スコアと SC 尺度値の間にそれぞれ有意な正の相関がみられ, EXH スコアと K 尺度値, AGG スコアと PT 尺度値, FAIL スコアと MA 尺度値の間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。IM 群では AGG スコアと HY 尺度値, PASS スコアと MA 尺度値, ICP スコアと D 尺度値, FEAR スコアと L, PT 尺度値, DES スコアと HS, HY 尺度値との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。また TEN スコアと F, SC, SI 尺度値の間に負の相関, SD 尺度値との間に正の相関が有意であった。このうちから例えば AGG スコアをとりあげると、N群において MA 尺度値との間に有意な正の相関がみとめられたが ED 群においては PT 尺度値との負の相関, IM 群においては HY 尺度値との負の相関が有意であった。以上の結果は、実験的に検査定義を教示に加えることやその内容が、ハンドテストスコアと MMPI 人格特性尺度との相関関係、即ちハンドテストスコアがどのような人格特性を反映するかについて影響を及ぼすことを示している。

考 察

本研究の結果より、ハンドテストを施行する際に実験的に検査定義を教示に加えることによって、ハンドテストスコアが変動することが明らかになった。また、教示に加えられた検査定義の内容は、ハンドテストスコアがどのような人格特性を反映するかについて影響を及ぼすことが示された。

第一に、ハンドテストスコアの中央値について、“情

緒障害検査”という検査定義を教示に加えた ED 群、“想像性検査”という検査定義を教示に加えた IM 群のそれぞれと、標準的な教示によるN群との間にみられた有意差について考察をすすめる。実験的に検査定義を教示に加えることによって、ED 群, IM 群の被検者は、それぞれの検査場面に對して異なる認知をし、異なる構えをもって検査に臨み、このような認知や構えの差異が、N群との間にハンドテストスコア中央値における有意差を生じさせたと考えられる。従って、本結果は、ハンドテストスコアのうち ACQ スコア, DES スコア及び *H-L* 値が、教示に加えられた“情緒障害検査”定義によってひきおこされる検査場面に對する認知、構えによって影響されること、また ACQ スコア, TEN スコア, ICP スコア, DES スコアが、教示に加えられた“想像性検査”定義によってひきおこされる検査場面に對する認知、構えによって影響されることを示していると考えられる。

教示に加えられたそれぞれの検査定義によって、どのような検査場面の認知とそれにひき続く検査に對する構えがひきおこされたかについて、1つの解釈を試みると以下ようになる：即ち、教示に加えられた“情緒障害検査”定義によって、被検者は、自身の“情緒障害”の程度を判定されるという予測をもつ。このようにネガティブな特性を一方的に判定される検査場面は、被検者にとって不快なものである。そのため被検者は、検査の圧力、検査に對する抵抗を感じ、刺激図版との間に心理的な距離を保とうとする構えをもつ。そこで、達成しようとする強い意志を刺激図版に投影した ACQ 反応が少なくなり、“何をしている手か”を問う教示より逸脱して刺激図版に對する感想や印象を述べる DES 反応が多くなった。また刺激図版を前に時間をかけて考えこむことが少なかったために *H-L* 値が低くなったと考えられる。一方、教示に加えられた“想像性検査”定義によって、被検者はたいてい豊かな想像性を発揮しようとする。そして反応の内容が人格の内面的特徴に結びつけて解釈されるという恐れをもたずに、“いきいきとした独創に富んだ”反応をできるだけ多く反応することが望ましいという予測をもつ。また検査の圧力を感じるものが比較的になく、気軽に検査にとり組むことができたと思われる。そこで、防衛的な構えが弱まり、個人的な体験を豊かに盛り込んだ TEN 反応が多く、“病、傷、死に冒された手”である ICP 反応も回避されることなく多く産出され、“何をしている手か”を問う教示より逸脱して気軽に刺激図版に對する感想を述べる DES 反応も多くなった。また“想像性”は一般に素質的なものであり後天的な努力とは無縁のものであると認識されているので、“努力”的傾向が投影された ACQ 反応が少なくなったと考えられる。

次に、ハンドテストスコアと MMPI 人格尺度値との間にみられた相関より実験的に教示に加えられた検査定義の及ぼす影響について検討したい。まず標準的な教示による N 群では両者の間にみられた有意な相関の数は最も少なかった。“情緒障害検査”定義が教示に加えられた ED 群では HS, D, SC といった病理的尺度値と特定のハンドテストスコアの間に有意な正の相関がみとめられた。すなわち“手からわざと力を抜いている”PASS 反応は心気症傾向, “目標を達成しようとする懸命な対物行為”ACQ 反応は鬱病傾向, “手が病, 傷, 死に冒された”ICP 反応は分裂病傾向の指標となった。結果的に ED 群では反応の内容は精神病理的な意味を持つものとなった。“情緒障害検査”定義が教示に加えられることによって被検者は“情緒障害”を念頭に置きながら検査に取り組むことになる。このために刺激図版により想起され, 投影される体験は被検者の情緒的な生活のうちでも特に病理的な側面に関わり深いものとなることが推測される。一方, “想像性検査”定義が教示に加えられた IM 群ではハンドテストスコアと MMPI 尺度値の間に有意な相関が多く認められ, そのほとんどは負の相関であった。このことは IM 群において AGG, PASS, TEN, ICP, FEAR, DES 反応など通常は不適応の指標とされる反応を多く産出することが逆に精神病理的傾向を否定することを示している。

このように各群の相関表がそれぞれ異なる様相を示していることから検査定義を教示に加えることやその内容によって同じ反応が異なる人格特性の指標となることが明らかになった。さらに検査定義が教示に加えられた場合, 被検者は検査定義を意識しながら刺激図版に向かうために産出された反応は検査定義と関わりの深い人格特性を反映する傾向がみられた。

本来ハンドテストは“その反応の脈絡いかにいかかわらず同じ反応は同じ意味をもち解釈のルールはテストされるすべての個体にとって同じである”(Piotrowski 著 上芝訳, 1980)という条件にかかっているとされてきた。ここで述べられている“反応”とは意識的努力を伴わずに刺激よりひきだされた自発的反応である。Piotrowski が“テスト結果が自分の不利になるように使われるのではないかと心配しているなら意識的努力が顕著になってテスト結果の意味は疑わしくなろう。…たとえそれが些細なことであっても多少しではっきりした理性的, 目的的な課題の要素が加われれば, 自己表現には制約が加わることになる。”(Piotrowski 著 上芝訳, 1980)と述べているようにハンドテストにおいても検査目的は説明されない。もし被検者が検査目的に関する質問を発しても“手が何をしているかを言えるかどうか知りたいだけです”といった無難な応答でやりすごすように指示されている。こうしてハンドテストは“目的的な課題要

素”を排除し“意識的努力”の伴わない反応を理想としているといえる。ハンドテスト考案者は本研究の結果が示すような検査定義が教示に加えられることによる影響を十分に予測した上で“目的的な課題要素”を排除し純粋に自発的な反応を得ようと努めているものと思われる。このことはまず第一に, ハンドテストを考案者らの手引書に従って解釈する際には手引書に忠実に施行することが重要であり検査状況の設定においても考案者らの意図している状況にできるだけ近づけるように努力する必要を示している。

しかし現実の検査場面において検査目的, 検査定義を伏せておくことによって目的要因を排除し尽くすことは不可能であろう。たとえ検査目的, 検査定義が教示に加えられなくとも被検者は検査の状況より非言語的なものも含めてさまざまな手がかりをひき出しこれらに関して何らかの主観的な予測を持つからである。N 群に対して行われた主観的な検査定義に関する調査の結果がこのことを裏づけている。また実験的に教示に加えられた検査定義が反応に影響を及ぼすという本研究の結果は, 被検者の主観的な検査定義が反応に影響を及ぼす可能性を示唆するものである。

Schachtel (1966) はロールシャッハ法に関する研究において“(検査場面における対人的要因, 課題要因, 目的要因等)の主観的なうけとり方は直接にあるいは間接に, はっきりとあるいは微妙に反応全体に影響を及ぼす”と指摘している(Schachtel 著 空井・上芝訳, 1975)。そしてロールシャッハ法においては既に種々の検査状況要因が反応に影響を及ぼすことが実験によって明らかにされている。ハンドテストにおいてもハンドテストがこれらの影響を免れることができないとすればこれら検査状況の影響を“やっかいな誤りを引き起こす排除すべきものとみなすのではなくて, 被検者の人格構造や態度を考察するための貴重な資料とみなす”(Schachtel 著 空井・上芝訳, 1975)方向づけも重要である。ハンドテストの施行に際しても検査状況に細かい神経を配り検査者自身をも含めた状況が被検者にどのように受け取られているかを察知しながら検査をすすめ解釈する際の資料とすることが望まれる。

要 約

ハンドテストは幅広い知的水準に適用でき, 脅威の少ない簡便な投影法であるが, 反応の内容を解釈の基礎とすることから検査場面の目的要因の影響を被りやすいことが予測される。そこで本研究では, ハンドテストを施行する際に, 実験的に検査定義を教示に加えることによってハンドテスト反応がどのように影響されるかを調べた。また同時に MMPI を実施して特定の人格特性とハンドテスト反応との相関に及ぼす影響についても検討し

た。

その結果，“情緒障害検査”定義が教示に加えられた群では標準的な教示による群に比較して DES 反応が有意に多く ACQ 反応が有意に少なくなった。“想像性検査”定義群では同様に DES, TEN 反応が有意に多く ACQ, ICP 反応が有意に少なくなり検査定義を教示に加えることやその内容がハンドテストスコアに影響を及ぼすことが確認された。またハンドテストスコアと MMPI 尺度値との間の相関も異なる様相を示した。

結論としてハンドテストを考案者らの手引きに従って解釈するためには手引きに忠実に施行して検査場面の要因を最小にとどめることが重要であることが確認された。しかしこれらの要因を排除し尽くすことは不可能であるので検査状況が被検者にどのように受け取られているかを察知しながら検査をすすめ、これを踏まえて解釈することが望まれる。本研究で得られた結果はその資料として役立つものである。

引用文献

- Calden, G., & Cohen, L. B. 1953 The relationship of ego-involvement and test definition to Rorschach test performance. *Journal of Projective Techniques*, 17, 300-301.
- Henry, E. M., & Rotter, J. B. 1956 Situational influences on Rorschach responses. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 457-462.
- 肥田野 直 1978 人格目録項目の社会的望ましさの評定 東京大学教育学部紀要, 18, 49-82.
- 箕浦康子 1970 ハンドテスト 臨床心理学研究, 6(1), 37-41.
- ピオトロフスキー Z. A. 上芝功博(訳) 1980 知覚分析 新曜社
(Piotrowski, Z. A. 1957 *Perceptanalysis*. New York: Macmillan.)
- シャハテル E. G. 空井健三・上芝功博(訳) 1975 ロールシャッハテストの体験的基礎 みすず書房
(Schachtel, E. G. 1966 *Experimental foundations of Rorschach's Test*. New York: Basic Books.)
- Singer, M. M., & Dawson, J. G. 1969 Experimental falsification of the Hand Test. *Journal of Clinical Psychology*, 25, 204-205.
- Wagner, E. E. 1962 a *The Hand Test manual*. Los Angeles: Western Psychological Services.
- Wagner, E. E. 1962 b *Hand Test: Manual for administration, scoring and interpretation*. Los Angeles: Western Psychological Services.

—1987.3.6. 受稿, 1987.7.11. 受理—